

## 第2部 上の園古墳群出土として 保管されていた土器整理報告



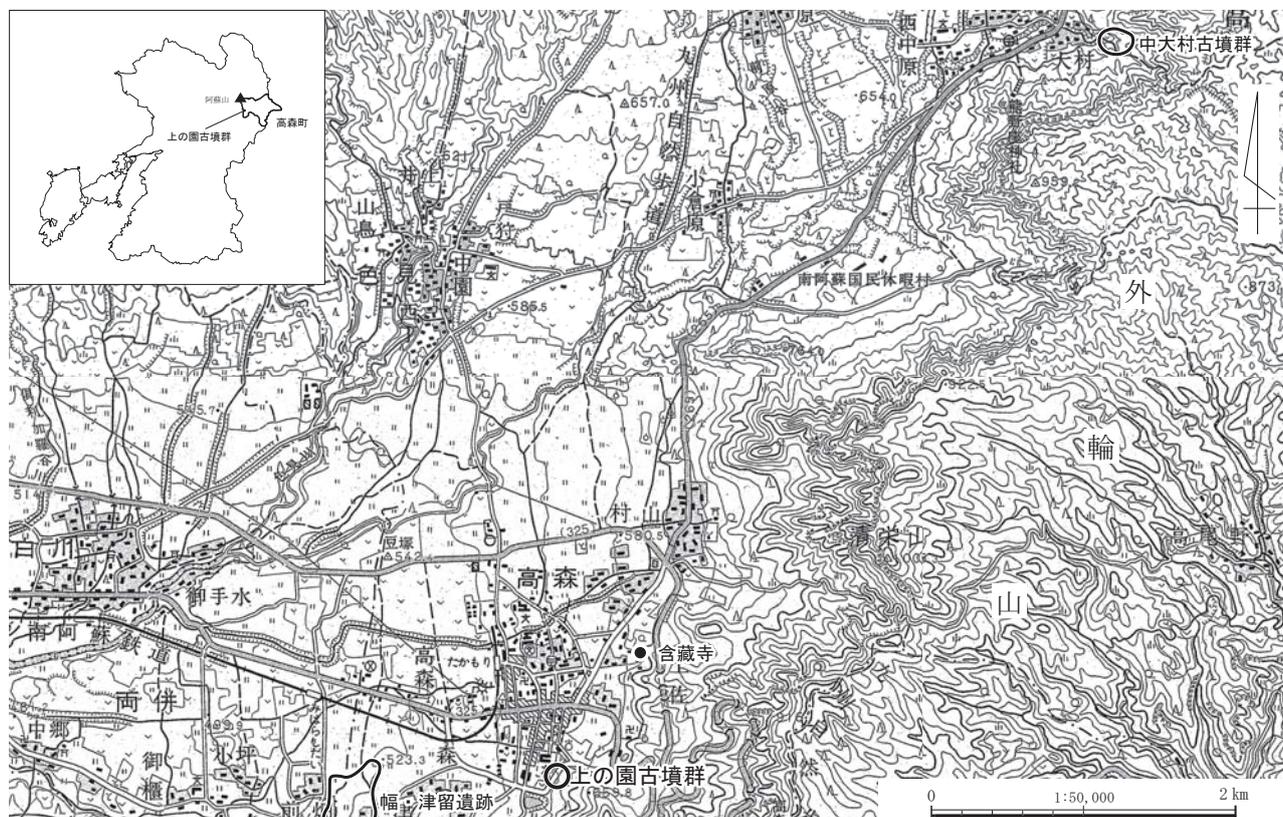
実測の様子

## 一 位置と環境

上の園古墳群は熊本県阿蘇郡高森町高森字上園に位置する古墳群で、4基の古墳から構成される。遺物の時期から、いずれも古墳時代後期とされる（今村 1979：pp. 88-90・96）。高森町は東部が宮崎県西臼杵郡高千穂町、東北部が大分県竹田市に接した熊本県最東端の地域である。高森町の中心部は南郷谷の東端にあり、本古墳群はその外輪山麓に位置している（第18図）。

高森町を含む南郷谷は、阿蘇谷とは異なる起伏に富んだ地形をなす。カルデラ壁は起伏に富む一方、カルデラ外部はゆるく波をうつような地形となっている。これは阿蘇火砕流堆積物が、古い地形の凹凸を埋めたためと考えられている。このような環境であるため、高森町はカルデラ壁を境界としてカルデラ内部と外部で大きく地形が異なる。カルデラ内部と外部では最高約500mもの比高差を示すほか、そうした地形ばかりでなく気候や風土といった面でも二分される。また、現地形の表層を覆うように降り積もる火山灰は保水性が低く、加えて平坦地が少ないことから、近年まで河岸段丘沿いの棚田や段畑が中心であった。

高森町には上の園古墳群のほかにも多くの遺跡が存在する。上の園古墳群の西側にある幅・津留遺跡は縄文時代から中世にかけての遺跡であり、特に弥生時代後期の鉄製品が大量に出土したことで著名である。上色見大村<sup>かみしきみ おおむら</sup>に位置する中大村古墳群では、山麓の平坦面に6基以上の石棺が分布する。時期は古墳時代前期から中期に位置づけられ、鉄剣や竪櫛、人骨が出土した。1981年調査1号石棺付近で溝が確認されたことから、方形周溝墓の主体部であると推測されている。このことは方形周溝墓の分布が阿蘇カルデラ内の標高700m以上の高地にも及ぶことを示している。（三浦希）



第18図 上の園古墳群の位置

## 二 上の園古墳群の概要と今回の報告に至る経緯

### 1. 上の園古墳群に関する過去の調査成果

上の園古墳群は、熊本県阿蘇郡高森町高森字上園に所在する。そこは、高森中央小学校グラウンドの南側、旧高森中学校の跡地である。古墳群は、1948年、新制中学校発足にともなう旧高森中学校新築工事の際に発見された。そのとき調査されたのは1～3号墳で、調査日は1号墳が1948年10月23日、2号墳が同29日、3号墳が1949年3月28日である。その後、1973年6月12日には、グラウンド東側の畑地において4号墳が発見され、同24日にかけて調査が行われた。

これら調査に関する正式報告はないが、すべてにかかわった今村俊男によって、その概略が示されている（今村1979・1980）。ただし、今村の記述内容にいくつかの矛盾がみられる点には注意が必要である。たとえば、1～3号墳の埋葬施設型式に関しては、「箱式石棺三基出土」（今村1979：p.79）という記述のほかに、「第1号墳、横穴式石室石棺、山の傾斜地に第2号及び第3号石棺発見され」（同：pp.91-92）や「昭和二十三年十月、全二十四年三月、横穴式石室石棺発掘され」（今村1980：p.258）との記述もある。また、1号墳出土遺物についても、記載箇所によってその内容が異なっている（第7表）。こうした点に留意しつつ、今村の記述をもとに1～4号墳の内容を以下に整理する。

なお、1～3号墳は破壊されたが、4号墳は現地に保存され、その埋葬施設の周囲には擬木による柵が設けられている。

**1号墳** 1号墳は、東から西にのびる尾根西端の高まり頂部にあり、開墾前は円墳のようであったらしい（第19図2）。しかし、墳丘を有していたのかどうかは不明である。発見されたのは箱式石棺とされ、その大きさは縦3.10m、横1.10m、高さ約1mとされる（今村1979：p.80）（第19図4）。また、『高森町史』（今村1979）の86頁には、どの古墳についてなのかが明記されないまま、「石棺は附近のほゞ中央にあり、…（中略）…地表面から僅か二尺位の所にあり組合せ式で用材は厚手の安山岩の板石にて底石を欠くものである。組立ては左右両石を上面を揃えて埋め立て両端に近く前後の石を置いて外側は荒削りの儘であるが内側は立派な平面で朱が塗られているが模様は見受けられない」と説明されている。この冒頭に記された「石棺は附近のほゞ中央にあり」という立地を念頭に置いて第19図2をみれば、ここで説明されたのは1号墳（図中の第一石棺）であると判断できる。そこで、あらためて要点を整理すれば、地表面下およそ60cmで検出されたこと、底石を有さないこと、石材は安山岩であること、内面には赤色顔料が塗布されていたことを知ることができる。

この埋葬施設の型式であるが、今村が示した寸法によれば、かなり大型の箱式石棺と評価できる。幅が1.10mとやや広すぎるように思われるが、略図（第19図4）をみれば長側石を含んだ数値と考えられるので、石材の厚みを仮に10cmとした場合、棺内幅は約90cmとなる。なお、長さが3mを超える箱式石棺は阿蘇市<sup>ひがしての</sup>東手野古墳群の丸山の石棺など（乙益1962）に、また高さが1mを超えるものは上天草市<sup>おおとはなみなみ</sup>大戸鼻南古墳（濱田1917）に類例がある。ところで、第19図4では棺内中央に仕切りのための石材が配されているように描かれているが、詳細は不明である。また、第19図3のAに示されるように、「石棺は周囲に小石を積みあげ」（今村1979：p.80）とされるが、その構造も十分に理解できない。第19図4の下段に示された2つの断面図が意味するところもよくわからない。

さて、1号墳の出土遺物であるが、その記載箇所ごとに内容が異なっている（第7表）。そのため、出土遺物の種類はまったく確定できないが、今回の報告にかかわる土器については、『高森町史』80

頁の記述を尊重すると、須恵器の壺が出土したと理解できる。ただし、出土遺物の内容を箇条書きで整理した86頁にその記載はなされていない。その理由はよくわからない。

**2号墳** 2号墳は、1号墳の東側、鞍部をはさんだ丘陵尾根筋の斜面部で発見された(第19図2)。墳丘の有無は不明である。埋葬施設に関する情報は第19図5しかない。これによれば、それは1号墳と類似した箱式石棺の可能性が高い。棺内中央に仕切りを有すると思われる点も同じである。ただし、片方の小口に「小板石が積み重ねられ」ているとされる点が異なっている(第19図5)。箱式石棺の片方の小口石を板石積み壁体に変更した構造なのだろうか。詳細はよくわからない。

出土遺物は、『高森町史』87～88頁に、略図とともに示されている(第7表)(第20図2)。そのうち、図示された「輪鑑」は素環の轡であると判断できるので、出土遺物のうち「あぶみ」についてはその認定に疑問符がつく。また、「すゞめ模様」が何を表しているのか理解できない。今回の報告にかかわる土器では、略図から「赤土製高つき」は土師器の高坏脚部と、「首長土器」は須恵器の壺と判断できる。「蓋付き土器」は須恵器の蓋坏と推測できる。

**3号墳** 3号墳は、2号墳から東方へ丘陵尾根筋を若干登った斜面部で発見された(第19図2)。墳丘の有無は不明である。埋葬施設および出土遺物については、『高森町史』89頁の記述以外に情報はない。そこに記された「壁石の部分において煉瓦様の石で積み重ねられ内部を朱で塗ったと思われる」という所見(今村1979:p.89)、および略図(第19図6)をみれば、その埋葬施設は小規模な横穴式石室であったと推測できる。「少々円形に近い」との記述(同:p.89)および第19図6から、やや胴張り気味の玄室であった可能性がある。検討を要するのは、第19図6の断面図をもとにすれば、玄室幅が1.10mしかなく、また玄室高も低いと思われる点で、小型の竪穴系横口式石室のような構造になることも想定すべきなのかもしれない。

出土遺物は第7表のとおりである。土器も出土しているようだが、その内容は不明である。

**4号墳** 4号墳は1～3号墳から北東に少し離れた畑地にあり(第19図1)、その埋葬施設が現地表下10cmで発見された。墳丘の有無は不明である。埋葬施設は石蓋土壙墓である(第19図7)。蓋石は6枚で、安山岩製である。小型の石材および粘土で目張りされている。土壙墓の長さ1.85m、幅50cm、深さ67cmである。長軸方向は正確な東西で、床面の東小口から約10cmのところ粘土枕の痕跡が存在した。埋葬頭位は東と推測される。蓋石の下面および土壙壁面には赤色顔料が塗布されていたが、床面にはそのような形跡はみられなかったらしい。出土遺物は、「モミガラ様のもの骨粉らしき土壌」以外、検出されなかった(第7表)。(杉井)

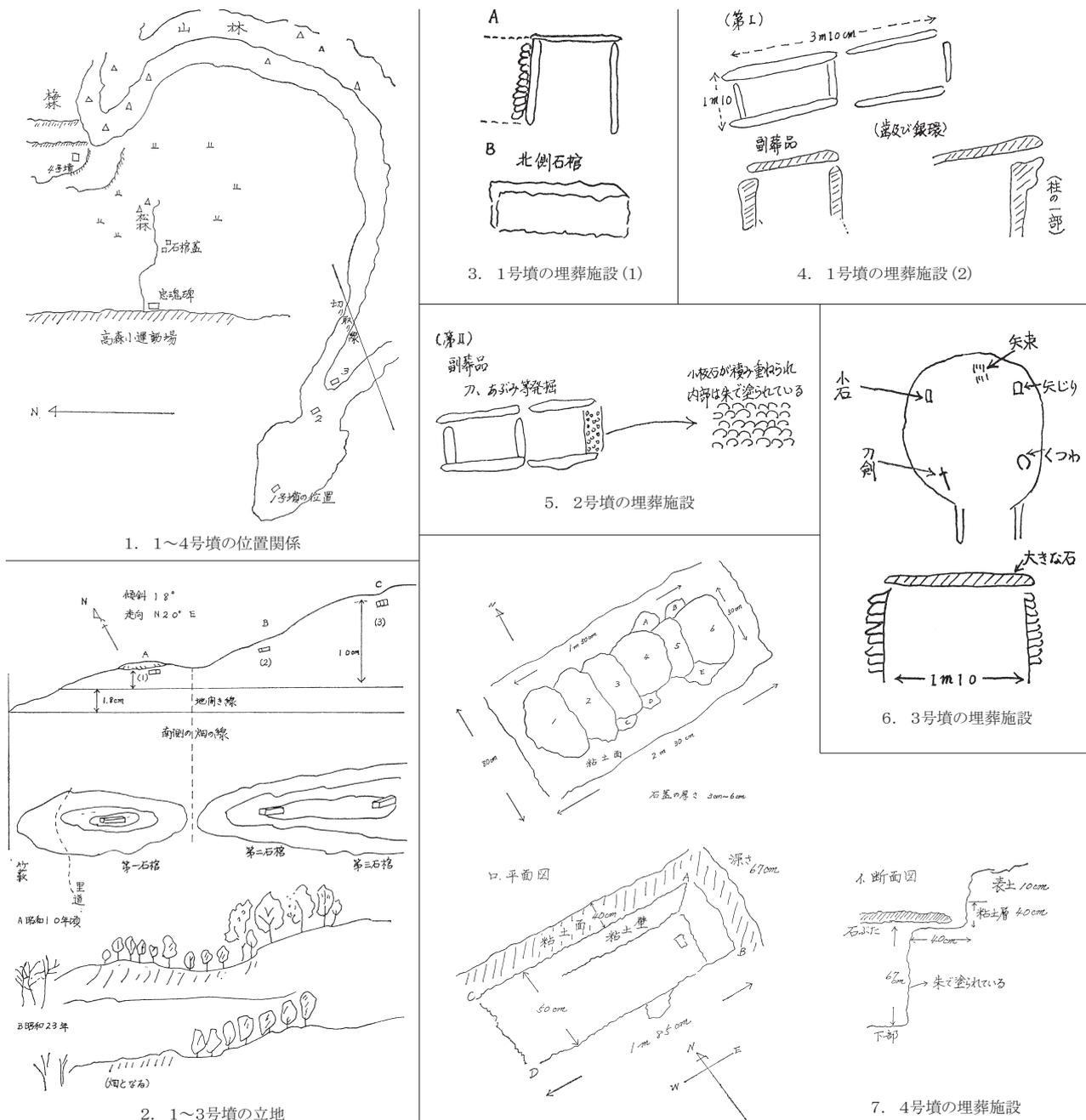
第7表 上の園古墳群1～4号墳出土遺物に関する記載内容の整理

	『高森町史』80頁	『高森町史』86-89頁	『高森町史』91-97頁
1号墳	棺内 ・人骨なし ・剣3 ・耳環1 付近の土中 ・灰色の陶器の壺(須恵器)	a 大刀1 b 耳環(銀環) c 歯牙(右側の下)6才臼歯にて37、8才の壮年の歯 d 小刀1 e 鉄鎌1 f 鎖の一部14 g 鉄片15	・鉄刀 ・鉄鎌 ・歯牙 ・金環 ・馬具 ・くさり ・土器、等
2号墳		・大刀3 ・あぶみ14 ・鎖2 ・刀柄2 h 土器:首長土器 蓋付き土器 高つき壺 ・すゞめ模様 ・破片	
3号墳		イ 刀剣3 ロ 小刀(刀子)1 ハ 鉄鎌14 ニ 轡1 ホ 鎖3 ヘ□ [杉井注…欠字] 数個 トと右 [杉井注…砥石か?] チ 土器 リ 馬具の金具	
4号墳			なし (枕附近の土中よりモミガラ様のもの骨粉らしき土壌)

## 2. 上の園古墳群出土遺物保管場所の変遷

上の園古墳群出土遺物は、現在、含藏寺（高森町高森 1809 番地）で保管されている。ここに至るまでの経緯を、『高森町教育誌 社会教育・社会体育の部』（岩下 1975）から抜粋する。

【岩下 1975 の 66 頁】昭和 46 年 10 月 7 日 昭和 23 年 11 月旧高森中学校建設に伴う地開き中発見され発掘調査された上園古墳群出土品は当時中学校に保管されていたが其の後（昭和 36 年頃）現中学校が新築されるに及び、これら出土品は阿蘇山上博物館へと移管されていた。阿蘇町職員の話によればこれ等埋蔵文化財出土品が亡くなり、少くなっている由、今村委員長と受領に行く。支配人宇都宮一喜氏に会い、当町の文化財保護事情を話した結果、本町関係分を受領することが出来た。しかし発掘した今村委員長を前にして、加成り出土品が紛失していることが判明したが中学校保管中か、山上博物館にてか不明である。



第 19 図 上の園古墳群 1～4号墳の位置関係およびその埋葬施設略図

※当日受領した出土品：

くさり5点、さげがめ10点、刀の鞘の破片5点、鉄刀4点、刀の破片10点、高杯（つき）11点、皿の破片13点、杯（つき）1点、平瓶18点、壺の破片2点、はそう5点

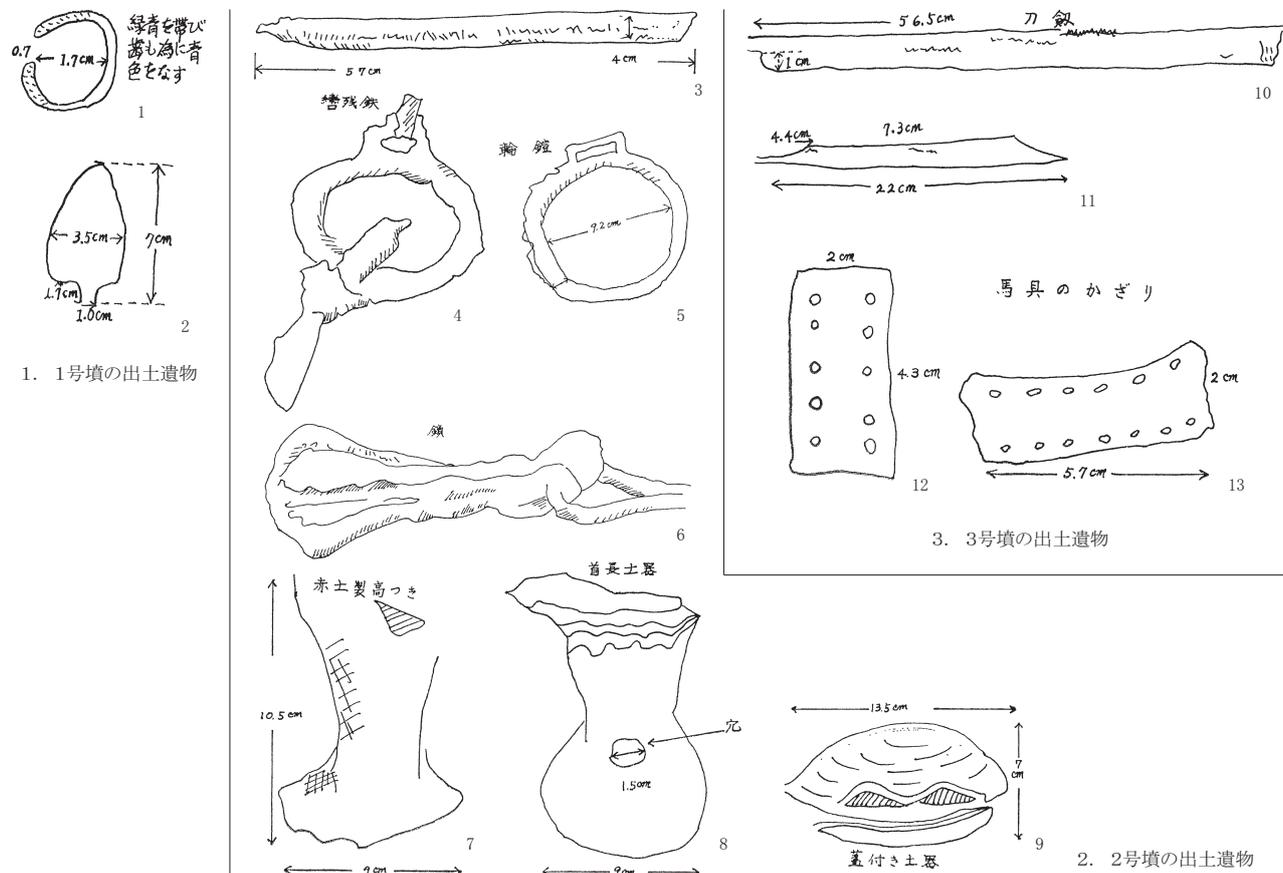
【岩下1975の68頁】昭和48年5月9日 上の園古墳群出土品 含藏禅寺内に整理保管

これをみると、出土遺物は、調査後しばらくは旧高森中学校で保管されていたが、1961年（昭和36年）頃、中学校新築に際し「阿蘇山上博物館」へ移管された。その後、1971年10月7日に高森町が引き取り、1973年5月9日に含藏寺で保管されるに至ったことがわかる。

後述のように、今回整理した含藏寺保管土器には、阿蘇市長目塚古墳1949・1950年調査出土土器が含まれていた。そうした混入が生じた経緯については、まだ調査中のため明確なことはいえない。しかし、「阿蘇山上博物館」移管中、あるいは「阿蘇山上博物館」からの引き取り時に、遺物の混乱が生じた可能性を考えている。なお、「阿蘇山上博物館」とは1966年11月に完成した阿蘇山上科学博物館のことと思われるが、確定的でない。さらに調査したい。（杉井）

### 3. 今回の報告に至る経緯

2020年12月、杉井健は高森町史編さん委員を委嘱された。新型コロナウイルス感染症への厳しい警戒がなされていた最中であり、しばらくは基礎資料調査もほとんど実施できないまま時間だけが過ぎていった。2023年7月、町史編さんに係る資料整理の一環として、また、熊本大学における考古学実習用の教材として、含藏寺保管土器の借用が許可された。そして、平原古墳群第8次調査終了後の10月に整理作業を開始し、今回報告するに至った。（杉井）



第20図 上の園古墳群1～3号墳の出土遺物略図

### 三 整理報告

熊本県阿蘇郡高森町含藏寺に上の園古墳群出土として保管されていた土師器と須恵器について述べる（図版 13）。今回報告するのは、土師器 2 点と須恵器 25 点である。（辻田）

#### 1. 土師器（第 21 図，第 8 表，図版 16-2・3）

**高坏（1）** 1 は高坏の坏底部から脚部で、脚裾部は一部のみ残存する。残存高 7.7 cm、残存脚部径 6.0 cm である。内面は橙色、外面は黄色が混じった橙色を呈する。胎土は 1 mm ほどの長石を含み、やや緻密である。焼成は良好である。内面では脚柱部の下部 2.2 cm にわたってケズリが確認できる。その後全面にナデが施される。外面では全面にナデが施されている。（辻田）

**蓋（2）** 2 は外面に黒色処理を行った蓋で、特異な形状の摘み部を持つ。口径 12.8 cm（復元）、体部最大径 13.4 cm（復元）、器高 7.5 cm（復元）、摘み部の高さ 3.7 cm である。内面はにぶい黄褐色を、外面は黒色を呈するが摘み部の一部はオリーブ黄色である。胎土はやや密で、焼成はやや良好である。天井部の内面にはユビオサエが確認でき、体部の内面にはヨコナデが施される。摘み部には全体的にユビオサエが施され、指紋や爪の痕が残る。摘み部と天井部の境にはユビオサエ後にヨコナデが行われる。天井部の外面にはヨコナデの後に斜めのナデが施されるが、口縁部にはヨコナデのみが行われる。外面は全体的に黒色処理され、ミガキが行われる。平坦な天井部から口縁部が垂直に下がる器形、および摘み部の形状から、漢城期の百濟土器の可能性はある（土田 2017）。（池上）

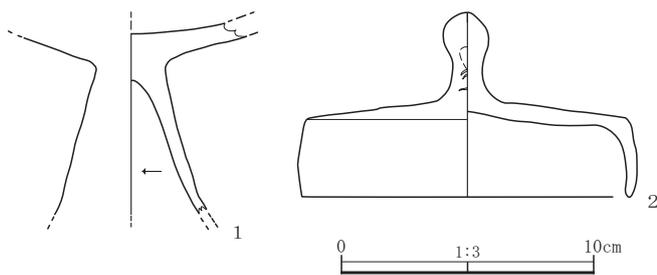
#### 2. 須恵器（第 22・23 図，第 9 表，図版 14・15・16-1・17）

**蓋坏（1・2）** 1 は坏蓋で口縁部から天井部まで残存する。口径 14.0 cm（復元）、残存高 3.8 cm であり内外面ともに灰色を呈する。1～5 mm の角閃石や長石が混じるものの胎土は緻密であり、焼成も良好で硬質である。内面にはヨコナデが施される。外面上部には回転ヘラケズリが行われ、その後にヨコナデが全体的に施される。また外面の天井部には「キ」の字のようなヘラ記号が施される。外面の下端部は強くヨコナデが行われ、稜が目立つ。

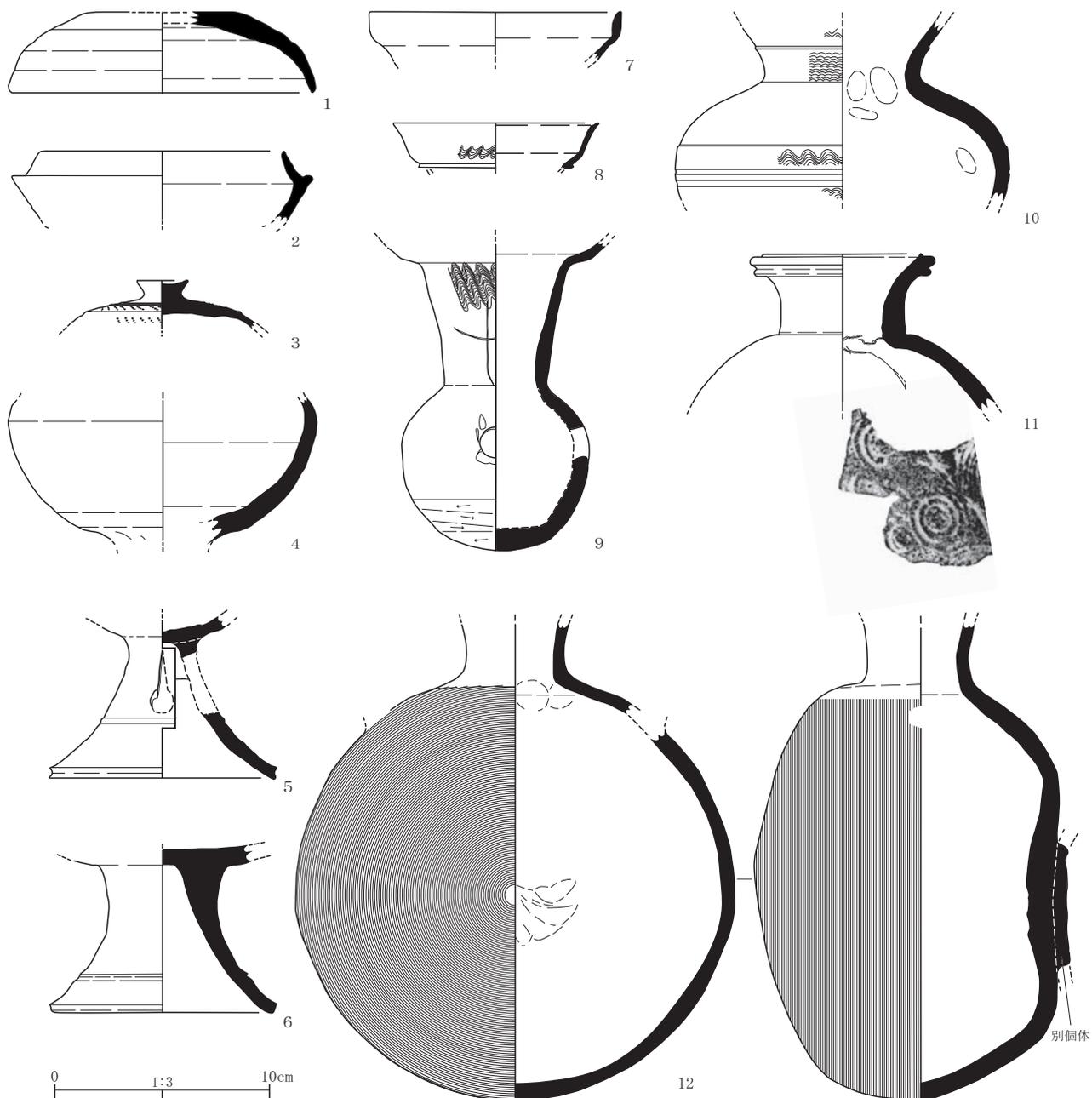
2 は坏身の口縁部から体部である。体部は受部から胴部の一部が残る。口径 11.4 cm（復元）、最大径 14.1 cm（復元）であり、内外面ともに灰オリーブ色である。1～3 mm 程度の角閃石、長石を含む胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。立ち上がり端部も受部先端も丸みを帯びている。

**高坏（3～6）** 3 は高坏の蓋であり、摘み部を有する。摘み部から天井部までが残存しており、

残存体部径 8.6 cm（復元）、残存高 2.3 cm で、そのうち摘み部の高さは 8 mm となる。摘み部は上面が 2 mm 程窪んだボタン状である。内面は黄灰色や茶色が入り混じったにぶい黄色であり、外面は黄灰色を呈する。外面に灰色がかかった自然釉がわずかにみられる。胎土はやや粗く、1 mm 程度の角閃石や 1～5 mm 程度の長石の砂粒を含む。焼成は良好だが、摘み部の上面は風化も



第 21 図 土師器実測図



第22図 須恵器実測図(1)

相まって少々粉っぽくなっている。内面にはユビオサエが施される。外面には全体的にヨコナデが行われ、その上に摘み部を中心とした円周状のカキ目が施される。カキ目の外周には4点1組の刺突列点文が2列確認できる。器形の全貌は把握できないが、刺突列点文が斜めに施されることや、胎土や焼成の様相がほかの須恵器と異なった印象を受けることから、陶質土器の可能性はある。

4は高坏の坏部である。残存最大径14.4cm(復元)、残存高6.6cmで内外面ともに灰色である。胎土は1~4mm程度の角閃石や長石を多く含むが、緻密である。焼成は良好で硬質である。内外面ともヨコナデが行われる。外面の下部には刀子刃先によると思われる傷跡が平行に2条みられ、これは脚部に長方形透孔を開けるために切り込みを行った際に付いたものだと考えられる。

5・6は高坏の坏底部から脚部が残存する。5は底径10.6cm(復元)、残存高7.7cmである。内面は全体的には暗灰黄色だが黒色を呈する部分もある。外面は黄灰色で、脚部外面と坏底部内面のとこ

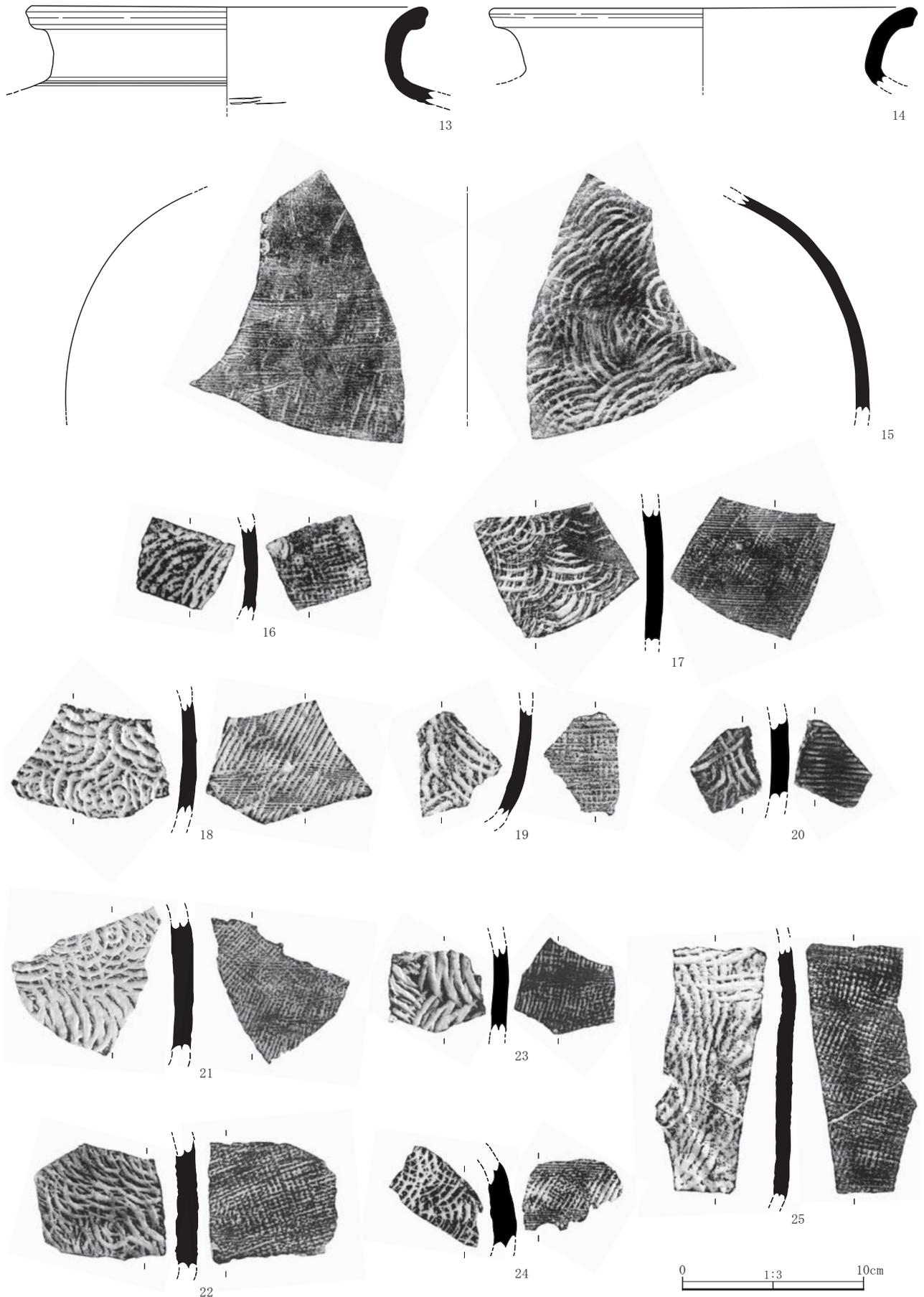
ろどころに緑色の自然釉が付着しており、このことから無蓋であった可能性がある。1mm前後の長石を含むが胎土は緻密である。焼成も良好できわめて硬質である。内外面ともに丁寧なヨコナデが施され、脚部外面の中央には凸線がめぐる。脚部の破断面には透孔があり、その上部には縦方向に2.0cm程の鋭い切り込みがなされている(図版17-2・3)。この状況から、透孔の形状は火焰形であったと判断できる。さらに、図示したこの透孔から器体に沿って左に5.0cm移動したところに、同形の透孔と考えられる円弧と直線が接続した切り込みがある(図版17-4)。円周が15cmであることと、円孔部分どうしの間隔が5.0cmであることから推測すると、透孔は3方向に設けられていたと判断できる。また、この切り込み部分を含む穿孔部分のみが黒く変色し、つやがある。自然釉も付着する。なお、透孔の内面側は丁寧な面取りがなされておらず、穿孔時にはみ出した粘土が少し残っている。火焰形透孔を持つ高坏は朝鮮半島南部に位置した加耶、とくに阿羅国(現在の韓国咸安地域)を中心に分布する。火焰形透孔が施される点や、その下に凸線がめぐる点でも、5と阿羅国圏で出土する資料は類似している。そのことから5は朝鮮半島からもたらされた陶質土器の可能性が非常に高い。

6は底径10.4cm(復元)、残存高7.9cmである。内面は灰色、外面は暗灰黄色を呈する。1mm前後の角閃石や長石を多く含むものの、胎土は緻密である。焼成は良好できわめて硬質である。脚部外面と坏底部内面には緑がかった自然釉が付着しているため無蓋であった可能性がある。内外面ともに丁寧にヨコナデが施される。脚部と坏部の接合部内面には余分な胎土がはみ出ている。外面の脚裾部には1条の凹線がめぐる。6は透孔こそみられないものの、胎土や焼成の状態が5と非常に似通っているため、これも陶質土器の可能性はある。

**壺(7~10)** 7・8は壺の口縁部である。7は口径11.4cm(復元)、残存高2.3cmであり、内外面は灰色を呈する。1mm程度の角閃石、長石の砂粒を含むものの胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。8は口径9.4cm(復元)、残存高2.1cmである。全体的に灰白色を呈するが、ところどころで浅黄色が見受けられる。1mm程度の角閃石、長石の砂粒をやや含むが、胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。内外面ともに丁寧なヨコナデが施されており、外面ではヨコナデのうえに5本単位の施文具による波状文がめぐる。口縁部と頸部の境は凸線によって明瞭な段を形成していると考えられるが、頸部へと続く器壁は異様に薄い。

9の壺は口縁部こそ欠くがほぼ完形であり、胴部最大径8.8cm、残存口径9.8cm(復元)、残存高14.6cmである。内面は灰色、外面は灰オリーブ色を呈する。1~5mm程の長石の砂粒や、1mm程度の角閃石の砂粒を多く含むが胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。内外面ともにヨコナデが施される。内面の底部付近には段が形成される。外面の頸部上半部には16本単位の施文具による波状文がめぐり、その波状文に一部被さるようにして縦4.0cm、横3.6cmの十文字のヘラ記号が刻まれる。底部外面ではヘラケズリが行われ、その方向は左右定まっていない。穿孔は外面から内面に向けて行われており、内面に押し出された粘土は除去されている。粘土を除去する過程で、透孔下部にはユビオサエが行われ、窪みが生じている。

10は頸部から胴部が残る個体である。穿孔部は遺存しないが壺と判断する。胴部最大径15.7cm(復元)、残存高8.4cmであり、内面は褐灰色、外面は黒褐色を呈する。内面口頸部と外面肩部に淡黄色の自然釉が付着する。胎土は緻密だが1mm程度の角閃石や長石の砂粒を含む。焼成は良好できわめて硬質である。肩部と胴部の内面ではユビオサエがなされる。外面では、頸部の凸線の上下において細かい波状文が施される。頸部上部が欠けているため凸線の上の波状文の施文具の単位はわからないが、下の方は11本単位の施文具によるものである。胴部の最大径付近には凹線で区画された中に6本単



第23図 須恵器実測図(2)

位の施文具による大きい波状文が施される。この大きな波状文の凹線を挟んで下の部分には、頸部の波状文よりもやや大きいサイズの波状文が施されるが、胴部下半を欠損しているため施文具の単位は判断できない。また外面下端部ではヨコナデを確認できる。

**短頸壺 (11)** 11は口縁部から胴部が残る短頸壺である。口唇端部径7.4 cm (復元)、残存部の最大径14.0 cm (復元)、残存高7.4 cmである。内面は灰白色、外面は黄灰色である。1～3 mm程度の角閃石、長石を含むが胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。口頸部には内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。外面の頸部と肩部の境には沈線がめぐり、内面では粘土のつぎ目がみられることから、口頸部と胴部は別々に製作された後に接合されたことがうかがえる。胴部内面には当て具痕の同心円文が残り、その上から右下がり斜め方向のナデが施される。また、この斜め方向のナデと向きを同じくする粘土のつぎ目も確認される (図版 17-1)。胴部外面ではタタキ目はみられず、ヨコナデと斜め方向のナデが残る。胴部の成形は、胴部内面の調整および粘土つぎ目の方向がいずれも斜めであることから、器形の横方向に行われたことが明らかである。口頸部はその成形後の胴部に穿孔することで接合されたと考えられる。こうした技法は一般に提瓶や横瓶などにみられるものである。今回は提瓶にしては肩部が丸みを帯びていることから短頸壺としたが、提瓶などの可能性も残る。

**提瓶 (12)** 12は口縁部を欠くもののほぼ完形の提瓶で、最大径20.6 cm、残存高22.5 cmである。内外面ともに灰色を呈するがオリーブ黒色に変色している箇所もある。胎土は緻密で1 mm前後の角閃石、長石を含む。焼成は良好で硬質である。内面には回転ナデが施され、背面側の内面中央には明瞭なユビナデ痕が残る。頸部の基部内面にはユビオサエがなされ、これは頸部を体部に接合する際の痕跡と考えられる。正面の外面には全体にカキ目が施され、頸部の基部周辺には回転ナデによるナデ消しが行なわれる。背面の外面には全体的に自然釉の痕が大量にみられ、また背面中央には別個体の須恵器の一部が癒着していることから、焼成の際には背面が上になるように置かれ、その上に別個体を載せていた可能性がある。また、外周面の頸部付近の器壁がわずかに隆起しており、これは耳部分だと考えられる。しかし、現状では耳の形状を確認できない。

**甕 (13～25)** 13・14は甕の口縁部である。13は口縁部から肩部が残存し、口径21.4 cm (復元)である。内面は灰色、外面は灰オリーブ色を呈し、口唇部と肩部には灰色の自然釉が付着する。1 mm程度の角閃石、長石を含む胎土は緻密である。焼成も良好できわめて硬質である。内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。内面には当て具痕がみられ、外面の頸部と肩部の境にはカキ目が刻まれる。

14は口頸部のみで、口径22.6 cm (復元)である。内外面ともに灰オリーブ色で、外面全体と口縁内部の上部まで灰色の自然釉がみられる。1 mm程度の角閃石、長石を含むが胎土は緻密である。焼成も良好できわめて硬質である。内面も外面も丁寧なヨコナデが施されている。13と14は形状や口径、調整、色調、器壁の厚みが類似しており、同一個体の可能性がある。

15～25は甕の胴部片である。資料の中で全貌がわかるものはないが、調整や色調、器壁の厚みによって4種類に大別できる。平行タタキ目の上にカキ目が全体に施されているもの、平行タタキ目が判断しやすいもの、平行タタキ目の上にカキ目が間隔をおいて施されているもの、擬格子タタキ目となっているものに区分し、以下ではこの順で報告する。

15～18は平行タタキ目の上にカキ目を全体的に施す。15は最大体部径44.2 cm (復元)であり、内面は灰黄褐色、外面が黒褐色を呈する。破片上部に緑がかかった自然釉が付着する。長石を含むものの胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。外面には平行タタキ目の上に全体的にカキ目が施されている。内面の同心円文当て具痕は摩耗している。これとよく類似しているのが16である。16は

第8表 土師器一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考
			口径	底径	器高				
1	高坏	脚部	—	—	—	外：ナデ 内：ケズリ後ナデ	外：黄橙 内：橙	良好	
2	蓋	摘み部 ～ 口縁部	(12.8)	—	(7.5)	外：ユビオサエ・ヨコナデ後斜め方向ナデ・ミガキ 内：ユビオサエ・ヨコナデ	外：黒 内：にぶい黄褐	やや 良好	平坦な天井部から垂直に下がる口縁部 特異な形状の摘み部、摘み部に指紋と爪痕 漢城期の百済土器の可能性 長目塚古墳出土遺物と判断

( ) は復元値

第9表 須恵器一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考
			口径	底径	器高				
1	坏蓋	口縁部 ～ 胴部	(14.0)	—	—	外：回転ヘラケズリ後ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰 内：灰	やや 良好	「キ」のようなヘラ記号あり (外面)
2	坏身	口縁部 ～ 胴部	(11.4)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰オリーブ 内：灰オリーブ	良好	
3	高坏蓋	摘み部 ～ 天井部	—	—	—	外：ヨコナデ・カキ目 内：ユビオサエ	外：黄灰 内：にぶい黄	良好	自然釉付着 刺突列点文 ボタン状の摘み部を持つ 陶質土器の可能性 長目塚古墳出土遺物と判断
4	高坏	坏部	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰 内：灰	良好	脚部長方形透孔の穿孔工具痕 2 条あり
5	高坏	坏底部 ～ 脚部	—	(10.6)	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：黄灰 内：暗灰黄	良好	自然釉付着 火焰形透孔、陶質土器の可能性 長目塚古墳出土遺物と判断
6	高坏	坏底部 ～ 脚部	—	(10.4)	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：暗灰黄 内：灰	良好	自然釉付着 陶質土器の可能性 長目塚古墳出土遺物と判断
7	甕	口縁部	(11.4)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰 内：灰	良好	
8	甕	口縁部	(9.4)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰白 内：灰白	良好	5 本単位の施文具による波状文
9	甕	ほぼ 完形	—	—	—	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・ユビオサエ 内：ヨコナデ	外：灰オリーブ 内：灰	良好	16 本単位の施文具による波状文 十文字のヘラ記号あり (外面) 残存高 14.6 cm
10	甕	頸部 ～ 胴部	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ユビオサエ	外：黒褐 内：褐灰	良好	肩部～体部にかけて自然釉付着 頸部に 11 本単位と本数不明、胴部に 6 本単 位と本数不明の波状文あり 長目塚古墳出土遺物と判断
11	短頸壺	口縁部 ～ 胴部	(7.4)	—	—	外：ヨコナデ・斜め方向ナデ 内：ヨコナデ・斜め方向ナデ・同心円文当て具痕	外：黄灰 内：灰白	良好	粘土のつぎ目あり 提瓶の可能性
12	提瓶	ほぼ 完形	—	—	—	外：回転ナデ・カキ目 内：回転ナデ・ユビナデ・ユビオサエ・ナデ消し	外：灰 内：灰	良好	外面背面部には大量の自然釉付着 残存高 22.5 cm
13	甕	口縁部 ～ 肩部	(21.4)	—	—	外：ヨコナデ・カキ目 内：ヨコナデ・同心円文当て具痕	外：灰オリーブ 内：灰	良好	内面口唇部や外面肩部に自然釉付着 No. 14 と同一個体の可能性
14	甕	口頸部	(22.6)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰オリーブ 内：灰オリーブ	やや 良好	内面口唇部や外面肩部に自然釉付着 No. 13 と同一個体の可能性
15	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黒褐 内：灰黄褐	良好	上部に自然釉付着 No. 15・16 同一個体の可能性
16	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黄灰 内：褐灰	良好	No. 15・16 同一個体の可能性
17	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目・ナデ 内：同心円文当て具痕・ナデ	外：黄灰 内：暗灰黄	良好	
18	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：灰黄 内：黄灰	良好	
19	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ 内：同心円文当て具痕	外：黒 内：灰オリーブ	良好	
20	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ 内：同心円文当て具痕	外：黄褐 内：褐灰	良好	
21	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黒褐 内：灰	良好	No. 21・22・23 同一個体の可能性
22	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黒褐 内：灰	良好	No. 21・22・23 同一個体の可能性
23	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黒褐 内：灰	良好	No. 21・22・23 同一個体の可能性
24	甕	胴部片	—	—	—	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円文当て具痕	外：黒 内：灰オリーブ	良好	
25	甕	胴部片	—	—	—	外：擬格子タタキ・カキ目 内：同心円文当て具痕	外：灰 内：灰	良好	十文字のヘラ記号あり (外面)

( ) は復元値

内面が褐灰色、外面と断面が黄灰色である。1mm程度の長石を多く含むものの胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。内面には摩耗した同心円文当て具痕が残る。外面は平行タタキ目の上にカキ目が施されたものだと考えられる。タタキ目が格子のようになっている箇所も見受けられるが、これは平行タタキ目と直交するように施されたカキ目によるものである。調整が類似しており、また器壁の厚みも似ることを勘案すると、15と16は同一個体の可能性がある。17は内面が暗灰黄色、外面が黄灰色である。1mm程度の角閃石、長石を含むが胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。外面には細かい平行タタキ目のうえに0.5～1mmの間隔でカキ目が丁寧に施されている。内面には同心円文当て具痕が残っている。外面の中央部と内面の上部にナデが行われ、これによりカキ目と同心円文の一部が消されている。しかしながらこれは意図的になされたものとは考えにくい。18は内面が黄灰色、外面が灰黄色を呈する。1mm程度の角閃石、長石を含む。胎土は緻密で焼成も良好、そして硬質である。内面は比較的小さい同心円文当て具痕が残る。外面では粗く太い平行タタキが行われた後に、細かい間隔でカキ目が施される。平行タタキ目と直交して細かい木目が浮き出ているが、平行タタキ目と幅が大きく異なるため格子タタキ目にはみえない。

19・20は平行タタキ目が比較的好く残る。19は内面と破断面が灰オリーブ色、外面が黒色である。1mm程度の長石を含むが胎土は緻密である。焼成は良好で硬質である。外面には幅が均等で溝が細い平行タタキ目、内面には摩耗した同心円文当て具痕が残る。20は内面が褐灰色、外面と3辺の破断面は黄褐色を呈するが、1辺の破断面のみ灰色となっている。胎土は緻密で、焼成も良好、硬質である。内面には同心円文当て具痕が残る。外面のタタキ目は粗く太い。

21～24は平行タタキ目の上にカキ目が間隔をおいて施されている点で共通する。特に21～23は内面がところどころ黄褐色がみられる灰色、外面は黒褐色であり、破断面が灰褐色を呈する点、器壁の厚みが1cm前後である点で類似する。またいずれの資料も1mmに満たない長石を多く含んだ緻密な胎土であり、焼成が良好で硬質である。そして外面の平行タタキ目の上からカキ目が間隔をおいて施されるという共通性から、これら3点の資料は同一個体の可能性がある。なお、21と23は内面の同心円文当て具痕の幅とその深さ、外面のカキ目の間隔も共通しているが、22の内面に残る同心円文当て具痕は21や23のものよりも幅が狭く、また外面のカキ目の間隔も狭く細かい。24は内面と破断面が灰オリーブ色、外面が黒色である。胎土は緻密で、焼成は良好で硬質である。内外面ともに摩耗している。内面の同心円文からは、当て具を少しずつ移動させたことが推定される。外面の平行タタキ目の上に施されたカキ目は前述した3点よりも深く刻まれている。なお、これら21～24は一部格子タタキ目と思われる箇所も確認されるが、これは使用状況により次第に直交した木目が浮き出て、擬格子タタキ目となったものと考えられる。

25は擬格子タタキ目が明瞭である。内外面ともに灰色を呈し、1mm前後の長石を多く含む。胎土は緻密で焼成も良好、そして硬質である。内面の同心円文当て具痕は方向が定まっておらず、また打圧の加減も一定していない。外面は粗い擬格子タタキ目が施され、実測図上部の左側には十文字のヘラ記号が、下部にはカキ目が残る。

(池上)

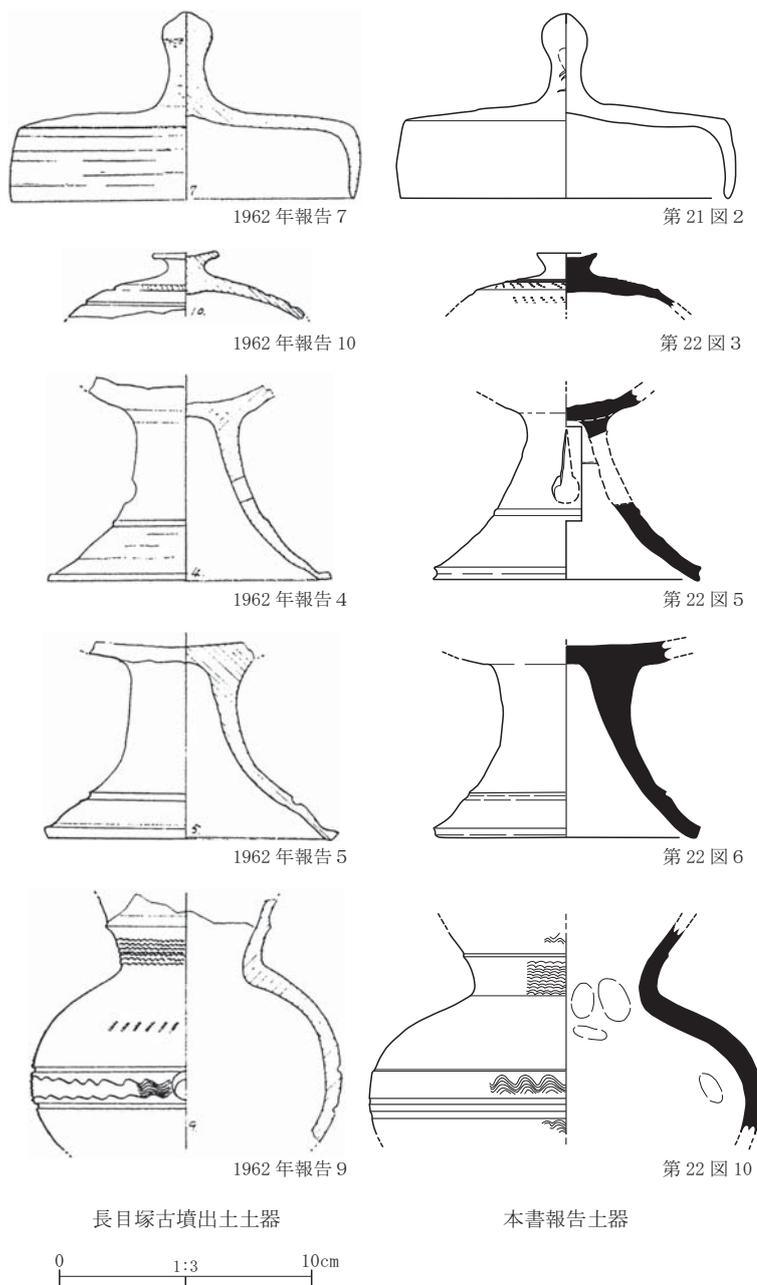
### 3. 阿蘇市長目塚古墳前方部出土土器の混入

#### (1) 所在不明となっていた長目塚古墳前方部出土土器

今回、上の園古墳群出土として保管されていた土器の検討を進める過程で、阿蘇市長目塚古墳前方部出土土器と類似している資料があり、両古墳の資料が混同している可能性に気付いた。なお、長目

塚古墳については、これまでに「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集（坂本1962，以下1962年報告と記述）および『長目塚古墳の研究』（杉井編2014，以下2014年報告と記述）で報告がなされている。

長目塚古墳は熊本県阿蘇市一の宮町中通1201-1に所在する墳長111.5mの前方後円墳で、中通古墳群の主墳をなす。その前方部出土土器について、1962年報告では第29・30図に須恵器10点と土師器3点が掲載された。しかし2014年報告において、須恵器10点のうち、第29図4～7・9～11および第30図1の計8点が所在不明であることが指摘された（杉井編2014：p.57）。すなわち1962年報告で示された資料のうちの大半が現在まで所在不明とされてきたことになる。ところが、今回、上の園古墳群出土として保管されていた土器の中に、所在不明とされた土器のいくつかと酷似する資料を認めた。それは土師器蓋2（1962年報告の第29図7）と須恵器高坏蓋3（同図10）、須恵器高坏脚部5・6（同図4・5）、須恵器壘10（同図9）の計5点である。次に、これらの資料と長目塚古墳出土土器を比較検討する。（池上）



第24図 長目塚古墳出土土器と本書報告土器の比較

(2) 長目塚古墳出土土器との比較検討（第24図）

土師器蓋2は外面に黒色処理がなされたもので、特異な形状の摘み部を持つ。口径12.8cm（復元）、体部最大径13.4cm（復元）、器高7.5cm（復元）、摘み部の高さ3.7cmである。これは1962年報告における第29図7の須恵器蓋の特徴と一致する。1962年報告では「7は径一三・三糎、縁高四・五糎、高さ三・五糎の高い抓が目立つ。焼は弱く黒漆を塗ったようである。類似は少い」（坂本1962：p.29）とされており、わずかな寸法差はあるものの、ほとんど一致する。また、縦に長い特異な形状の摘み部を持っていることや、黒色処理が行われていることなどの特徴が酷似しているため、土師器蓋2と1962年報告の須恵器蓋7は同一個体だと判断する。なお、1962年報告では須恵器とされているが、色調や硬度が須恵器よりも土師器に近く、一般的な須恵器の焼成とは異なっている。当資料は漢城期

の百済土器の可能性があるが、今回は土師器として扱った。

摘み部を持った須恵器高坏蓋3は、1962年報告の第29図10と類似する。1962年報告では「10は須恵質の蓋で凹みのある比較的大きな爪があり、二条の凹線と刻文がめぐっている」(坂本1962:p.29)とされる。今回報告の高坏蓋3は残存径8.6cm(復元)、残存高2.3cmである。そのうち摘み部の高さは8mmとなり、上面が2mm程窪んだボタン状である。外面には全体的にヨコナデが行われ、その上に摘み部を中心とした円周状のカキ目が施される。カキ目の外側には4点1組の刺突列点文が2列にわたって施される。これらのうち、摘み部の形状は1962年報告で示されたものと一致する。また、「刻文」が刺突列点文を表していると解釈すれば、文様も似通っている。しかしながら「二条の凹線」に関しては確認できず、むしろ刺突列点文下にはわずかな隆起がみられた。1962報告の第29図10から体部残存径を求めると9.6cm前後となり凹線部分が欠失したとも考えにくい。おそらく刺突列点文により盛り上がった胎土と窪み部分の差と、隆起部分の下部を凹線と捉えたのだと考えられる。このように多少の差異はあるものの、全体的な形や大きさは類似していることから、今回報告の高坏蓋3と1962年報告の第29図10は同一個体の可能性がきわめて高い。ただし、この個体は1962年報告では蓋として報告されているが、2014年報告では高坏の蓋と判断されている。理由としては「つまみがあることや長目塚古墳では蓋坏が1点も存在しないこと等」(杉井編2014:p.62)があげられており、今回は2014年報告にならい高坏蓋として取り扱った。

須恵器高坏脚部5・6は、それぞれ1962年報告の第29図4・5と類似する。1962年報告によると「坏部を失う。高台は漸次に下開きとなり径約一一糎、4には円孔と一条の帯がめぐっている。焼は固い。5は高台径一一糎余円孔なく、一条の凹線をめぐらす。焼は固い」(坂本1962:p.29)とされる。この第29図4と対応する今回報告の5は底径10.6cm(復元)、残存高7.7cmである。胎土は緻密で、焼成も良好できわめて硬質である。脚部中央には凸線がめぐる。また、3方向に火焰形透孔を有している。第29図5と対応する今回報告の6は底径10.4cm(復元)、残存高7.9cmである。胎土は緻密であり、焼成も良好できわめて硬質である。脚裾部には一条の凹線がめぐる。5・6とも径がほとんど一致し、「焼は固い」という記述とも矛盾しない。そして5では凸線、6では凹線が施されることや、その位置も1962年報告と一致する。これらの特徴から5・6は、それぞれ1962年報告第29図4・5と同一個体だと考えられる。なお、1962年報告では第29図4の透孔は円孔とされているが、これは円孔の上部にある鋭いきりこみが見落とされたためであると考えられる。

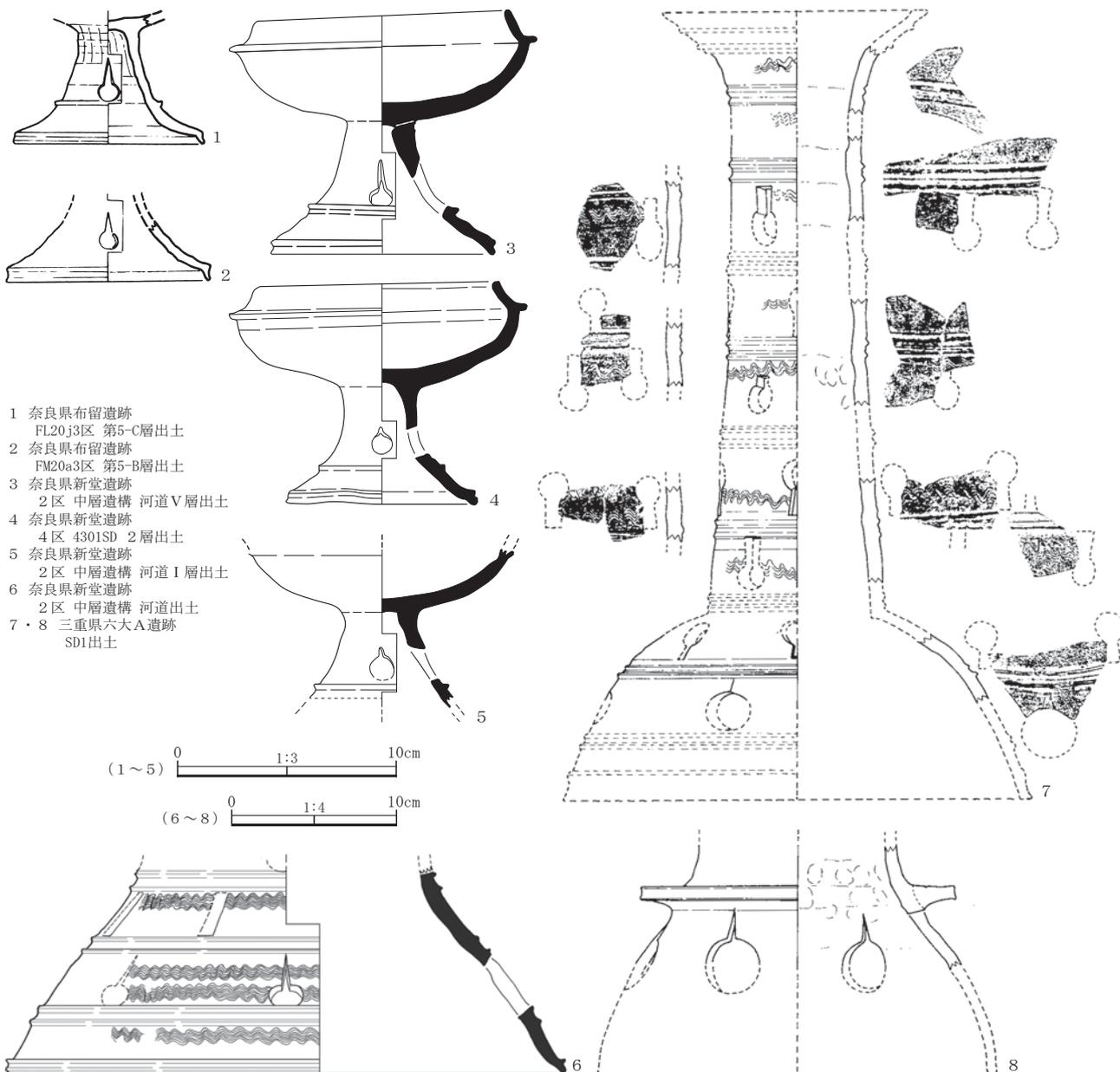
須恵器甕について、1962年報告では「9は口縁を欠失するが」「大体の器形をうかがうことが出来る。口縁は液体の注入に便利なように開くが長首とならず、腹は球形<sup>(ママ)</sup>で竹管を挿入する孔を上向きに穿ち、その上下に凹線を、その間に櫛歯により波状文をめぐらしている」(坂本1962:p.29)と記される。1962年報告の第29図から求めた甕9の最大径は12.2cmであり、器高は10.0cmである。これに対して、今回報告の甕10は最大径(復元)が15.7cm、残存高が8.4cmである。外面頸部には本数が不明な波状文と、11本単位の細かい波状文が、胴部の最大径付近には2条の凹線で区切られた中に6本単位の施文具による大きな波状文が施される。この大きな波状文の下部には、頸部のものよりもやや大きなサイズの波状文が施される。第29図9では外面頸部の上段の波状文と、胴部下部の波状文は描かれていない。しかしながら外面頸部には小さな波状文が施され、胴部では2条の凹線の間に大きな波状文がめぐっていることは一致する。そして寸法に多少の差異はあるが、頸部が短く、口縁部に向かって大きく開いていることは類似する。また、今回報告の10の外面肩部付近には自然釉が付着しており、判断が難しいものの、肩部と胴部の境には三日月状の文様も確認できる。また、

10の口縁部は欠損しているが、その形状は第29図9とよく似ている。このように器形や文様の共通性から、今回報告の10と1962年報告の第29図9は同一個体だと考えられる。ただし、第29図9と異なり、10には穿孔部が確認できない。おそらく今日までに失われてしまったのだろう。

以上から、今回報告した上の園古墳群出土として保管されていた土器のうちの5点は、所在不明となっていた阿蘇市長目塚古墳前方部出土土器であると判断する。このような混同が生じた経緯については現状では不明であるが、さらに調査を続け明らかにできればと考えている。(池上)

#### 4. 火焰形透孔を有する土器

長目塚古墳出土と判断した資料のうち、須恵器高坏脚部5は火焰形の特徴的な透孔を有する。この比較資料として、第25図に日本列島で出土した火焰形透孔を持つ土器をいくつか提示する。奈良県天理市布留遺跡から出土した高坏(第25図1)は、火焰形透孔の真下に凸線がめぐる点で5と類似するが、脚端部が下方に折れ曲がる点などの相違もみられる。(池上)



第25図 火焰形透孔を持つ土器の類例

## 四 まとめ

今回整理報告を行ったのは、熊本県阿蘇郡高森町の含藏寺に保管されていた高森町上の園古墳群出土とされる資料 27 点である。しかし、整理作業中に阿蘇市長目塚古墳出土資料の混入が確認された。このため、今回扱った資料は、上の園古墳群出土資料が土師器 1 点と須恵器 21 点、長目塚古墳出土資料が土師器 1 点と須恵器 4 点、の内訳となる。

**上の園古墳群出土資料の検討** 今回整理した上の園古墳群出土土器には注記や遺物カードが付されておらず、それぞれの土器が 4 基ある古墳のいずれから出土したのか不明であった。そこで、すべての古墳の調査にかかわった今村俊男の記録（今村 1979・1980）をもとに特定を試みたが、出土資料の内容が記載箇所によって異なっていたり、土器の器形が詳述されていなかったりと、情報に矛盾や不足がみられた。そのため確信をもって出土古墳を特定できるものは少なかったが、出土状況や時期について手掛かりがある土器もいくつか見受けられた。

まず、須恵器の壺 11 である。『高森町史』（今村 1979）の 80 頁には 1 号墳から「灰色の陶器の壺」が出土したと記されており、この記述を尊重すると当該資料は 1 号墳からの出土ということになる。しかし出土資料を簡条書きで整理した 86 頁には記載がないほか、2 号墳からも壺が出土したとされており、確実性に欠ける。次に、土師器の高坏脚部 1 と須恵器の甗 9 である。この 2 点については、『高森町史』の 87・88 頁に、2 号墳の出土資料として「赤土製高つき」「首長土器」なる土器が略図とともに掲載されている。略図に記された法量や器形などの特徴から、それぞれこの高坏脚部 1、甗 9 と判断できる。よってこれら 2 点は、2 号墳から出土したものとみて差し支えない。略図にある「蓋付き土器」は須恵器の蓋坏と推測でき、今回報告した須恵器の蓋坏 1 や 2 が該当する可能性はあるが、他に図示していない破片もあるため、その確証はない。なお、甗はラップ状に開く口頸部や頸部上部に施された櫛描き波状文から T K 10 型式段階に位置づけられる。2 号墳は集成編年 9 期に築造された可能性がある。

そのほかの土器については、各古墳から出土した土器群が「土器」と一括されて報告されており、器形や文様などの詳細が不明であるため特定できない。『高森町史Ⅱ』には「上の園古墳出土品」と題された写真が掲載されているが（今村 1980 : p. 259）、画質やアングルの問題で器形や文様がとらえにくい。それに加えて、写真内の土器は残存率が高い大型の破片もしくは完形に近いものが多いが、今回整理した土器は小破片が約半数を占める。収蔵の過程で割れて小破片と化した可能性もあるが、今回の整理作業では破片は 2 組しか接合せず、そのどちらも写真内の土器と確実に同定できるようなものではない。長目塚古墳出土資料が混入する事実を鑑みると、本来の上の園古墳群出土資料の一部が行方不明となっており、さらには他の遺跡の資料も混在している可能性も否定できない。

なお、上の園古墳群からは、刀剣や鉄鏃といった鉄器や金環、轡や馬具の金具、歯牙なども出土している。今回はこれらの実見までは手が及ばず整理報告には至らなかったが、土器群の混乱を考えれば再検討は必須であろう。実際に、1971 年に高森町が「阿蘇山上博物館」に保管されていた上の園古墳群出土資料を引き取った際、「加成り出土品が紛失している」（岩下 1975 : p. 66）ことから、現在残されている資料と『高森町史』に記載されている出土資料の記述とを照らし合わせ、現状を確認するのが今後の重要な課題となるだろう。

**長目塚古墳出土と考えられる資料について** 今回、上の園古墳群出土とされる資料を整理する過程

で、所在不明であった長目塚古墳出土資料が5点確認された。図面番号で示すと、土師器の蓋2、須恵器の高坏蓋3、高坏脚部5・6、壘10が該当する。これらを観察した結果、須恵器の高坏蓋3および高坏脚部5・6は陶質土器、土師器の蓋2は漢城期の百濟土器である可能性が浮上した。

高坏蓋3は、中央が窪んだボタン状の摘み部を有し、それを囲むように円周状のカキ目が施されている。さらにカキ目の外周には4点1組の刺突列点文が2列確認できる。欠損のため器形の全貌は把握できないが、刺突列点文が斜めに施されることや、胎土や焼成の様相が須恵器と異なる印象であることから、本資料は陶質土器の可能性が考えられる。

高坏脚部5は、その破断面に観察できる透孔の形状が、円の上方にするどい切り込みを入れる特徴的な様相を呈しており、火焰形透孔をもつ陶質土器の可能性が高い。火焰形透孔が施された陶質土器は、かつて朝鮮半島南部に位置した加耶、とくに阿羅国（現在の韓国咸安地域）の領域を中心に分布し、日本列島でもおもに近畿地方からの出土が確認されている。とりわけ奈良県天理市布留遺跡から出土した火焰形透孔土器は、透孔の内面に穿孔時にまくれ上がった粘土がみられるほか、透孔の下縁に沿って凸線がめぐると、共通点が多い（竹谷 1983・2003）。また高坏脚部6も、透孔こそみられないが、胎土や焼成の状態が5と非常に類似しており、これも陶質土器である可能性がある。

土師器の蓋2は、今回土師器として扱ったが、平坦な天井部から口縁部が垂直に下がる器形、および摘み部の形状から、漢城期の百濟土器の可能性はある。

長目塚古墳の築造時期は集成編年6期後半から7期初頭、須恵器編年ではTK 73 型式段階後半からTK 216 型式段階初頭、すなわち古墳時代中期中葉でも早い段階に位置づけられている（杉井編 2014）。当該時期は熊本県地域において、それまで有力な首長墓系譜が存在しなかった内陸部の河川沿いに前方後円墳が築造される時期である。具体的には合志川中流域左岸の熊本市植木町高熊古墳（西嶋編 2004）や緑川中流域の熊本市城南町琵琶塚古墳（杉井 2006）があり、白川上流域の長目塚古墳もこれに含まれる。さらには、合志川中流域や緑川中流域からは帯金式甲冑や甕窯焼成による埴輪、朝鮮半島系渡来文物が出土しており、当時の中央政権が当該地域の地域権力との政治・経済関係を発展させようとした意図がうかがえる。この文脈で理解すると、長目塚古墳の被葬者が朝鮮半島系の土器を保持していたとしてもおかしくはないだろう。今回の成果は、遺物の混在、そして行方不明であった遺物の発見という思いがけない出来事が重なって得られたのであるが、今後の長目塚古墳や熊本県地域の古墳時代観の考察にまたひとつ新たな材料を加えることができたといえるだろう。

**上の園古墳群出土資料と長目塚古墳出土資料の混在について** 上記のとおり、今回整理した上の園古墳群出土資料の中に、行方不明になっていた長目塚古墳出土資料の混入が確認された。紛失した資料が発見できたのは喜ばしいことではあるが、同時に、過去何らかの形で資料の混乱が生じたことも判明したため、今後の管理のためにも両者の保管状況について確かめておく必要がある。

まず、上の園古墳群出土資料の保管場所の変遷は、『高森町教育誌 社会教育・社会体育の部』（岩下 1975）にまとめられている。発掘調査後、資料は旧高森中学校に保管されていたが、1961年頃、高森中学校が新築されることを受け、「阿蘇山上博物館」に移管された。1971年10月7日には高森町が受領し、1973年5月9日には含藏寺にて整理保管されるに至った。一方の長目塚古墳の出土資料は、1949年および1950年の発掘調査後、要望により阿蘇神社に保管された（緒方 2014）。以上のとおり、文献上では両者が同一施設に預けられた記録はなく、混乱が発生した経緯はまだ明確には分からないが、「阿蘇山上博物館」へ移管中、もしくは「阿蘇山上博物館」から引き取った際に何らかのアクシデントが生じた可能性を考えている。引き続き調査を継続したい。（松田）

## 引用・参考文献

- 李 柱憲 (竹谷俊夫・訳) 2002 「火焰形透窓土器の新視角」『天理参考館報』第15号、天理時報社：pp. 123-143
- 石坂泰士編 2020 『新堂遺跡』IV、橿原市埋蔵文化財調査報告第16冊、橿原市教育委員会
- 石坂泰士・上井佐妃編 2023 『新堂遺跡』VII、橿原市埋蔵文化財調査報告第19冊、橿原市役所
- 今村俊男 1979 「上世」『高森町史』高森町：pp. 67-114
- 今村俊男 1980 「高森町文化財資料(第一)」『高森町史Ⅱーふるさとの回顧と展望ー』高森町：pp. 232-269
- 岩下時雄 1975 『高森町教育誌 社会教育・社会体育の部』高森町教育委員会
- 緒方 徹 2014 「阿蘇神社所蔵資料にみる長目塚古墳発掘調査の舞台裏」『長目塚古墳の研究ー有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究ー』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、熊本大学文学部：pp. 91-97
- 乙益重隆 1962 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
- 河上 強 1979 「高森町の地学的自然環境」『高森町史』高森町：pp. 18-42
- 坂本経堯 1962 「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財報告書』第3集、熊本県教育委員会：pp. 1-40
- 申 敬澈 1983 「伽椰地域における4世紀代の陶質土器と墓制ー金海礼安里遺跡の発掘調査を中心としてー」『古代伽椰の検討』古代を考える34、古代を考える会：pp. 20-58
- 杉井 健 2006 「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』第89号 歴史学篇、熊本大学文学部：pp. 1-27
- 杉井 健編 2014 『長目塚古墳の研究ー有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究ー』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、熊本大学文学部
- 高田貫太 2022 「加耶土器の美」『加耶ー古代東アジアを生きた、ある王国の歴史ー』国立歴史民俗博物館：pp. 16-19
- 竹谷俊夫 1983 『布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土師器』考古学調査研究中間報告8、埋蔵文化財天理教調査団
- 竹谷俊夫 1985 「初期須恵器の系譜に関する一考察ー火焰形透孔をもつ陶器を中心にー」『天理大学学报』第145輯、天理大学学術研究会：pp. 64-80
- 竹谷俊夫 2003 「日本における火焰形透孔土器の系譜について」『天理参考館報』第16号、天理大学出版部：pp. 23-41
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯趾群Ⅰ』研究論集第10号、平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 「須恵器の製作技法」『須恵器大成』角川書店：pp. 14-33
- 鄭 宗鎬・村上恭通 2019 「幅・津留遺跡出土鉄製品の検討」『幅・津留遺跡』第2分冊、熊本県教育委員会：pp. 317-354
- 土田純子 2017 『東アジアと百済土器』同成社
- 西嶋剛広編 2004 「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究報告』第39集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-20
- 野田拓治 1983 「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号、新日本教育図書：pp. 38-49
- 濱田耕作 1917 「天草郡阿村の古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古学研究報告第1冊、京都帝國大學：pp. 44-47 (臨川書店により1976年復刻)
- 林田和人 2002 「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器ーその編年と地域性ー』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料、九州前方後円墳研究会：pp. 117-144
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社：pp. 24-26
- 穂積裕昌 2002a 「出土土器」『六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-16、三重県埋蔵文化財センター：pp. 107-149
- 穂積裕昌 2002b 「韓式系土器・初期須恵器の系譜」『六A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-16、三重県埋蔵文化財センター：pp. 415-420
- 宮崎敬士編 2019 『幅・津留遺跡』熊本県文化財調査報告第336集、熊本県教育委員会

## 挿図出典

- 第18図 : 国土地理院発行の5万分の1地形図(阿蘇山・高森)をもとに作成
- 第19・20図 : 今村1979の80・85-89・93-95ページ掲載図
- 第24図7・10・4・5・9 : 坂本1962の第29図7・10・4・5・9
- 第25図1・2 : 竹谷1983の挿図4-5・6
- 第25図3・5 : 石坂編2020の図99-729、図71-94を再トレース
- 第25図4 : 石坂・上井編2023の図39-194を再トレース
- 第25図6 : 石坂編2020の図123-1144
- 第25図7・8 : 穂積2002aの第357図3432・3434